

教室(診療科)紹介(114)

高い専門性を持った 優秀な一般小児科医を目指して

小児科学講座(大橋)

教授：清水教一
講師：二瓶浩一
医局長：那須野聖人

大橋病院における小児科の歴史

昭和39年7月の大橋病院開院とともに、小児科の診療もスタートしました。初代の小児科医長は、大森病院小児科より四家正一郎講師が専任として派遣されました。開院当初は、他の医局員は大森病院小児科より交代で派遣されていました。その後、小児科学研究室となって独立して運営されるようになり、昭和56年4月に当時大森病院小児科助教であった青木継稔現名誉学長がその初代の責任者として着任されました。そして、青木先生は昭和57年2月に教



写真1 医局員集合写真、病棟にて。

授に昇任され、本教室の初代教授となりました。その後、昭和62年に大橋病院小児科は、研究室から小児科学第二講座(第2小児科学教室)に昇格しました。青木先生が平成9年から医学部長に、そして平成12年から学長に就任されたことから、平成10年2月に四宮範明先生が教授に昇任され、診療部長を引き継がれました。平成21年7月からは関根孝司先生が3代目の教授ならびに診療部長として赴任されました。そして平成28年4月から清水教一が診療部長を引き継ぎ、平成30年2月から4代目教授を拝命しております。

私たちが目指す小児医療と小児科医

私たち小児科学講座(大橋)(大橋病院小児科)は、地域に根付いた医療を行うことを目指しています。地域の要望に応える形で、あらゆる領域をカバーする全般的な小児医療を行い、そして小児救急医療に積極的に取り組んでいます。さらに小児科領域の多くの専門外来を充実させていくことに全力を注いでいきたいと考えています。そのためには、教室員全員がcommon diseaseを高いレベルで診ることができ、かつそれぞれのsubspecialtyを持った小児科医であることが必要となります。幸い大橋病院は、その地域性等より多くのcommon diseaseを診ることができる病院です。小児科専門医を取得するまでの専攻医(後期研修医)時代には、病棟業務を中心としながら、多くのcommon diseaseを診ることによってGeneral Pediatricianとしての基礎を確立していきます。さらに、大森病院小児科、新生児科ならびに佐倉病院小児科、連携施設である国立成育医療研究センター麻酔科や大島医療センター等とも協力することによって、大橋病院だけでは経験できない症例や疾患、さらに地域医療等についても勉強することができます。今後は、これらの関連施設との協力体制をさらに充実させていきたいと考えております。

Subspecialtyに関しては、現在二瓶講師が循環器、中村助教と中澤医師がアレルギー、那須野助教が消化器、三嶋医師(非常勤)が内分泌・糖尿病、白井医師(出向中)が腎臓、そして清水が神経とウイルソン病の専門外来を行っています。さらに医局のOB・OGの先生方が、月1回程度血液とアレルギーの専門外来を行っています。また、大森病院小児外科黒岩教授に月1回小児外科外来をお願いしております。特に先天性銅代謝異常症であるウイルソン病は、青木継稔名誉学長から引き継がせていただいている大切な診療と研究のテーマです。日本全国から数多くの患者様が集まっており、東邦大学医療センター大橋病院小児科は、本邦で最も多くのウイルソン病症例を診ている施設です。最近では中国やカンボジアからも患者様が受診されていま



写真2 2018年11月3日. 本教室の初代教授である青木継稔東邦大学名誉学長を交えて、医局員、スタッフ（出向中、非常勤含めて）全員集合.

す。中国人の患者様の中には、3か月に一度中国から来日しながら通院されている方もいらっしゃいます。これからも、本邦におけるウイルソン病医療の中心的役割を担い、診療はもとより臨床ならびに基礎の研究を精力的に行っていきたいと考えています。

おわりに

小児科学講座（大橋）では、一般的な疾患を丁寧に診な

がら高い専門性を持った医療を行うこと、そして地域の皆様に愛される小児科・小児科医を目指して、教室員は日々精進しております。今後とも、ご指導のほどよろしく願いいたします。

（清水教一）

DOI : 10.14994/tohoigaku.2019-040